ドライデンのウェルギリウス翻訳
——その政治性について——

高　谷　　修

ジョン・ドライデン (John Dryden, 1631-1700) はチャールズ2世（1630-85）の在位中は王の愛顧を得て桂冠詩人 (Poet Laureate)となり王室修史官 (Historiographer Royal)ともなり、王党派の代弁者として活躍した。しかし1688年の名誉革命にともなってウィリアム3世の体制に移行すると、桂冠詩人の地位も王室修史官の地位をも剥奪され生計の途を絶たれた。以後ドライデンは糊口をしのぐ為に再び劇作に向かい四つばかりの作品を書いたが、どれも比較的に不成功であったようだ。そして以後は本格的に古典の翻訳に従事することになる。出版者のジェイコブ・トンソン (Jacob Tonson, c1656-1736) とウェルギリウス (Vergilius, 70-19 BC) の翻訳に関してドライデンが出版契約を結んだのは1694年6月15のことであった[1]。翻訳は 1697年に予約出版という形で刊行された。1697年6月の *London Gazette*紙にはトンソンによる広告が掲載され、それによると予約者 subscriber には次の週には翻訳を提供できると記されている[2]。そして8月10日頃までには一般読者にも提供された。これによってドライデンは1400ポンドほどを得たようだ[3]。この金額は後にアレクサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) がホメロス訳で手にした額とは到底比較できないが、ともあれ経済的に一息つけたことには間違いない。このウェルギリス翻訳はドライデンが死亡した年に出版された『古今説話集』(*Fables Ancient and Modern*, 1700) と共にドライデンの晩年の傑作であると言ってよいであろう。

ウェルギリウスは『牧歌』『農耕詩』そして『アエネーイス』の全ての作品をダクテュリコス・ヘクサメトロス（長短短六歩格 dactylic hexameter）で書いた。三作を合せて13,000行程になる。そしてドライデンはウェルギリウスを最も慣れ親しんでいた英雄二行連句を用いて訳した。そして原作はドライデンでは18,000行に変わった。そしてドライデンのウェルギリウス翻訳に関して、その政治的な偏向性を指摘することが最近の流行であるように思われる。その政治的な偏向性とは翻訳の所々に於いてドライデン自身の個人的なトーリー派的な感懐が表明されていることを指す。つまり一方に於いて時の王ウィリアム３世に対する揶揄や偏見があり、他方に於いて亡命中のスチュアート王朝のジェイムズ２世の復帰への希望が表白されている、と言うのである。それも故の無いことではない。ドライデンは名誉革命後の政治体制から冷遇されていたが、当然のことながらウィリアム (William, 1650-1702) とメアリー (Mary, 1662-94) の新体制に対する反感を持っていた。それ故に、ドライデンのそのような感情が翻訳という形を借りて書き込まれており、ドライデンのウェルギリウス訳はその意味で反ウィリアム的趣向の伺える政治的偏向訳だというのである。

以上のような見地に立ってドライデン翻訳を考察している学者として、William Frost 氏や Steven Zwicker 氏などを挙げることが出来る。二人は大筋において、ドライデンの詩句を当時の政治的な状況の中において解釈することを通して、ドライデンが当時の政治体制に対する不満や感懐等を密やかに、また露骨に書き込んでいると論じている[4]。しかし、全体では18,000行にものぼるウェルギリウス翻訳の特徴を、政治的な偏向訳という用語で片づけるにはVirgil翻訳の政治性は余りにも複雑であるように思われる。ドライデンの政治的な偏見・偏向性を論じる際に、その解釈の妥当性について疑念を惹起するような場合もあるように感じられる[5]。またあまりにも僅かの部分から結論を導き出しているような印象を与える場合も無いとは言えないのである。

ドライデンがウェルギリウスを翻訳するにあたり、幾分かの感懐を書き込んでいることは明かである。翻訳に込めた感懐は多くの場合ポスト名誉革命体制

下におけるドライデンの個人的な状況と密接に関連している。そして一般論としてはドライデンが翻訳に込めた感懐とは、名誉革命で王位を追われたジェイムズ2世の後を襲ったウィリアム3世に対する反感と偏見であると言えるあろう。しかし問題はそれほど単純であるようには思われない。ドライデンの政治的偏見・偏向性は現在論じられているよりもより複雑な局面を持っているように思われるのである。本論ではドライデン訳の政治的な偏向性について、特に『牧歌』の第4歌の有様を中心に考察することで、ドライデンのウェルギリウス翻訳の政治的な偏向性の内実を検証したい。

1

ドライデンが翻訳に際して個人的な感懐を挿入している場合があることは、大筋では否定できない事実である。そのような一例として例えば『農耕詩』の例が挙げられる。『農耕詩』の第3巻のテーマは家畜である。羊を飼うことについての部分では、ウェルギリウスは砂漠の地ヌミディアのような熱帯で飼う場合を述べた後で、次には寒冷の地での牧畜を次のように描いている。

hic noctem ludo ducunt, et pocula laeti
fermento atque acidis imitantur vitea sorbis. 380
talis Hyperboreo septem subiecta trioni
gens effrena virum Rhipaeo tunditur Euro
et pecudum fulvis velatur corpora saetis.[6]

Georgica, III, 379-83.

ここでは北方に住む人々の生態が描かれている。その地に住む人々は夜を気晴らしをして過ごし、そしてビールと酸っぱい七竈の果汁を歓び、葡萄酒を飲んでいるようなつもりになる。そして極北の北斗七星の下に住んでいる連中は人々の中でも粗野な人々で、リパエイ（スキュティア北部の山脈のこと）の東

風に吹きつけられており、そして衣服ときたら動物の褐色の毛皮によって体を包んでいると言う。この部分をドライデンは次のように訳している。

Their jovial Nights, in frollicks and in play
They pass, to drive the tedious Hours away.
And their cold Stomachs with crown'd Goblets cheer,
Of windy Cyder, and of barmy Beer. 585
Such are the cold *Ryphaean* Race; and such
The savage *Scythian*, and unwarlick Dutch.
Where Skins of Beasts, the rude *Barbarians* wear;
The spoils of Foxes, and the furry Bear.[7] （下線は筆者）

Dryden, *Georgics*, III, 582-89.

原文の5行はドライデンでは8行に拡大されている。一読して気づくことはドライデンにおいては、表現が説明的になり装飾がやや多くなることである。例えば夜 nox は the tedious Hours と明示される。また葡萄酒の杯 pocula vitea は crown'd Goblets となり、ビール fermentum は barmy と形容詞が付けられている。そして家畜の褐色の毛皮 pecudum fulvis saetis は狐 Foxes や熊 Bear と細分化され描かれている。行間に隠されていた意味は明かとなっている[8]。北方の人々の野蛮性は the rude Barbarians と明示される。また北方の北斗七星の下 Hyperboreo septem trioni という表現で示される地域は、言葉に馴染みがない為かこれを直訳的に訳すことは避けられている。（これらはいずれもドライデンの翻訳の特徴であるが、この点については本論文では詳述しない。）

そして最も注目すべきことは、これらの北方の人々の中の一人として unwarlick Dutch がいることである。この表現に相当する部分は原文にはない。そして「戦争嫌いのオランダ人」とは、当然のことながら1688年の政治的な危機の時にオランダから乗り込んできたオレンジ公ウィリアムを指すことは明かである。そのウィリアムが現在妻のメアリー（先のジェイムズ2世の娘）と供にイギリ

スを共同統治しているのである。「戦争嫌いの」とは、ウィリアムが即位後、大陸の政治に積極的に関与し戦争を遂行したことに対する痛烈な皮肉である。北方の人々の野蛮性を描く中で、ドライデンはさりげなく時の王ウィリアム3世に対する悪意をこのような形で明かにしている。ウィリアムに対する偏見が表されていることは記憶すべきことのように思われる。

同様な偏見は他の箇所においても見いだすことが出来る。『農耕詩』第4巻は養蜂についての論考である。ウェルギリウスは、巣箱の素材やそれを置くべき場所の選択、また春から夏にかけての蜂の生態を描いた後、巣分かれ（分蜂と言う）に際して対処の仕方を以下のように教授する。

hi motus animorum atque haec certamina tanta
pulveris exigui iactu compressa quiescunt.
Verum ubi ductores acie revocaveris ambo,
deterior qui visus, eum, ne prodigus obsit,
dede necti; <u>melior</u> vacua sine regnet in aula. 90
alter erit maculis auro squalentibus ardens.
nam duo sunt genera: hic <u>melior</u> insignis et ore
et rutilis clarus squamis; （下線は筆者）

Georgica, IV, 86-93.

春の巣分かれの時期に新しい巣を求めて飛び去る前、蜂の大群が空中を乱舞することは度々目撃されるところである。こうした行為は分蜂と呼ばれるが、ウェルギリウスはこの蜂の乱舞を戦争に喩えている。「この様な暴動も、これほどの戦いも僅かの砂を投げかけることで鎮圧されて納まるのである」という。そして「指揮官を両方ともに、君は戦場から呼び戻した時、劣っていると見える方を、それが邪魔にならない様にするために、死に委ねよ。より好い方 'melior' のみが宮廷で支配するようにさせよ」と忠告する。そのより好い方は金色の斑点で輝いているだろう、という。「なぜなら、彼らには2種類があって、より好

い方は顔立ちもよく、輝く鱗で光っている。」蜜蜂の王が実は雌であることは17世紀になるまで知られてはいなかったことはここでは直接の関係はない[9]。原文では「より好い方」は外見からそれと知れる、と述べている。これは多くの子供を生まなければならない女王は、当然、身体的にも優れていなければならないという現実的な理由も関係していると思われるが、ともあれウェルギリウスは生まれや家柄などという視覚的には捉えられない優越性よりも、肉体という外見的な優越性を強調していることは記憶しておかなければならない。

これに対応する部分はドライデンでは以下のようになっている。原文の８行は13行に拡大されているが、この装飾過多で多弁とも言うべき明示的な翻訳の傾向はここでも変わることはない。

Yet all those dreadful deeds, this deadly fray,
A cast of scatter'd Dust will soon alay,
And undecided leave the Fortune of the day.
When both the chiefs are sund'red from the Fight,
Then to the lawful King restore his Right.
And let the wastful Prodigal be slain, 135
That he, who best deserves, alone may reign.
With esase distinguish'd is the Regal Race,
One Monarch wears an honest open Face;
Shap'd to his Size, and Godlike to behold,
His Royal Body shines with specks of Gold, 140
And ruddy Skales; for Empire he design'd,
Is better born, and of a Nobler Kind. （下線は筆者）

Dryden, *Georgics*, IV, 130-42.

ここでもまた説明的な字句が多く用いられ、ともすれば解説的な叙述になる傾きがあることなどはすぐに気づくことであるが、既に指摘したのでここでは繰り返さない。政治的な含意に注目したい。まず原文では外見的に見目麗しい方

を重用せよ、と忠告していた。「より好い方」'melior' とのみ形容されている指揮官は、見目麗しいという点で顕著な違いがある、とされていたが、ドライデンにおいては、「より好い方」は「正統の王」'the lawful King' に変えられている。しかも「その王に彼の権利を取り戻してやれ」 'to the lawful King restore his Right' と言うのである。原文では単に 'melior vacua sine regnet in aula'（より好い方が権力を保持し、宮廷では単独で支配するがよかろう）とあるのみであるが、ドライデン訳からは微妙に異なるニュアンスが醸し出されているのである。ここでは正統の王とは言うまでもなく、現在はフランスに亡命中のジェイムズ2世のことである。136行もまた意味深長である。'he, who best deserves, alone may reign'（最も然るべき者だけが君臨するように）という行間から、ウィリアム3世よりもジェイムズ2世の方が王として相応しいという含意を読みとることは、さほど難しいことではない。「一人の君主」'One Monarch'「王の体」'Royal body'「帝国」'Empire'「より高貴な種類の」'Nobler Kind' というような語句の多用から解るように、原文では肉体的・外見的に「より好い方」は、ドライデンでは全て政治的な文脈に移し変えられている。このことに注意する必要がある。そしてその背後にあるのは反ウィリアム的感情であると言えよう。

そしてこのような反ウィリアム的な感情は『アエネーイス』に於いても散見される。第6歌に於いて、主人公アエネアス Aeneas はシビル Sybil に導かれて、黄金の枝をもち地下界を訪れるのであるが、ここでもドライデンは然気無い言葉遣いでニュアンスを付加している。

hic quibus invisi fratres, dum vita manebat,
pulsatusve parens, et fraus innexa clienti,
aut qui divitiis soli incubuere repertis 610
nec partem posuere suis ... （下線は筆者）

Aeneis, VI, 608-11.

ここに描かれているのは、アエネアスが訪れる地下界において出会う死霊達である。罪を犯したが故に苦しむ者達が描かれている。その者達とは、生きている時に兄弟を嫌い、親を打った者達である。また家来に詐欺を働いた者や、また獲得した財産を大事に見張り一部分でさえも自分の身内にも与えない者達がいる、というのである。これらの者達はドライデン訳では次のようになっている。

Then they, who Brothers better Claim disown,
Expel their Parents, and usurp the Throne; 825
Defraud their Clients, and to Lucre sold,
Sit brooding on unprofitable Gold:
Who dare not give, and ev'n refuse to lend
To their poor Kindred, or a wanting Friend: (下線は筆者)
Dryden, *Aeneid*, VI, 824-29.

「兄弟を忌み嫌い親をも打つ」者は、ドライデン訳では顕著な変化を被っている。まず「彼らは兄弟の正しい申し立てを否定した者」とされる。また彼らは「両親を追放し、王座を簒奪」した者 (l.825) とされる。このような暗示的な表現から、名誉革命に際して自らイギリスに乗り込み岳父であるジェイムズ2世を追放し、王座を手にしイギリス王として君臨したウィリアムを連想することは難しいことではないと思われるのである。

そのような文脈のもとで、829行を再読してみれば、同じような暗示を読みとることが出来るのである。「彼らの可愛そうな身内を援助することを拒否する者」'who dare not give, and ev'n refuse to lend/ To their poor Kindred' という表現から、フランスに亡命し不遇をかこつジェイムズ2世に対するウィリアム3世という構図を読みとるような読者がいても不思議はないように思われてくるのである。(この部分は実は第4代ローダーデイル伯爵 Earl of Lauderdale, Richard Maitland の残した翻訳に多くを負ており、事情は上に述べたほどには簡単ではない。そ

の点に関してはまた後で触れる。)

以上のような考察の結果として一応次のように言えるであろう。ドライデンのウェルギリウス訳には、時の王ウィリアム3世に対する嫌悪が時には巧みに、時には露骨に描かれている箇所があるということである。この点は否定できぬ事実として認めなければならないと思われるのである。しかしこうした局面は以下に見るように、決して単純ではない。次に『牧歌』の第4歌の在り方を検証することを通して、政治的性の特質を考えたい。

2

ウェルギリウスの『牧歌』の第4歌は古来とりわけ有名な作品であった。ある御子の誕生によって黄金時代が再来するというテーマ故に、中世においてはキリストの誕生を予言した歌としても理解されて来たのであった。第4歌は次のように始まる。

> Sicelides Musae, paulo maiora canamus.
> non omnis arbusta iuvant humilesque myricae;
> si canimus silvas, silvae sint consule dignae.
>
> *Eclogae*, IV, 1-3

まず詩人はシシリアのムーサ達に祈願する。彼女達は、シラクサ生まれの詩人で紀元前3世紀に活躍したテオクリトス(Theocritus)に霊感を与えた牧歌の女神達である。続いて皆が木立や取るに足らぬ檉柳(ぎょりゅう)を気に入る訳ではないという。杜を歌うならば、執政官 consul に相応しい歌を歌おう、と始める。この歌は普通の牧歌が扱うよりも大きなテーマを語ろうとしているが、詩人自身もまたそれを意識していたのである。

この部分に対応するドライデン訳は次のようになっている。

Sicilian Muse begin a loftier strain!
Though lowly Shrubs and Trees that shade the Plain,
Delight not all; *Sicilian* Muse, prepare
To make the vocal Woods deserve a Consul's care.

原文の3行は4行になっている。ドライデンは英雄2行連句を基本的に用いている。また行間休止 caesura に対する配慮なども伺え、かなり原典に忠実に訳そうとしていることが推測できる。

ウェルギリウスは続いて黄金時代の到来を次のように描く。

Ultima Cumaei venit iam carminis aetas;
magnus ab integro saeclorum nascitur ordo. 5
iam redit et Virgo, redeunt Saturnia regna;
iam nova progenies caelo demittitur alto.
tu modo nascenti puero, quo ferrea primum
desinet ac toto surget gens aurea mundo,
casta fave Lucina: tuus iam regnat Apollo. 10
teque adeo decus hoc aevi, te consule, inibit,
Pollio, et incipient magni procedere menses;
te duce, si qua manent sceleris vestigia nostri,
inrita perpetua solvent formidine terras.
ille deum vitam accipiet divisque videbit 15
permixtos heroas et ipse videbitur illis,
<u>pacatumque reget patriis virtutibus orbem.</u>
At tibi prima, puer, nullo munuscula cultu
errantis hederas passim cum baccare tellus
mixtaque ridenti colocasia fundet acantho. 20 （下線は筆者）

Eclogae, IV, 4-20.

大意を要約すれば以下のようになろう。クーマエの歌が予言している最良の時

代が来て、そして偉大な時代が生まれつつあるというのだ。正義の女神アストライア Astraea も戻って来てサトルヌスの王国も再興するだろうという。そして新しい子孫が高き天より降ってくる。その子によって鉄の種族は絶え、黄金の種族が全世界に立ち上がる、という[10]。この輝かしい時代は、ポッリオが執政官の職に在る時に始まるという。そしてその子供は父の美徳でもって平和にされた世界を支配するという。その時は、子よ、土地は耕されなくとも、お前に最初の贈り物、あらゆる場所を這う蔦と芳香を放つ草を、歓んでいるアカンサスと交じっているエジプト豆を、注ぐのだ。原文はこのように、ポッリオが執政官の時に子どもが生まれ、その下で黄金時代が華開くだろうと言う。

この部分に対応するドライデン訳は次のようになっている。

The last great Age, foretold by sacred Rhymes, 5
Renews its finish'd course, *Saturnian* times
Rowl round again, and mighty years, begun
From their first Orb, in radiant Circles run.
The base degenerate Iron-off-spring ends;
A golden Progeny from Heav'n descends; 10
O chast *Lucina* speed the Mothers pains,
And haste the glorious Birth; thy own *Apollo* reigns!
The lovely Boy, with his auspicious Face,
Shall *Pollio*'s consulship and Triumph grace;
Majestick Months set out with him to their appointed Race. 15
The Father banish'd Virtue shall restore,
And Crimes shall threat the guilty world no more.
The son shall lead the life of Gods, and be
By Gods and Heroes seen, and Gods and Heroes see.
The jarring Nations he in peace shall bind, 20
And with paternal Virtues rule mankind.
Unbidden Earth shall wreathing Ivy bring,
And fragrant Herbs (the promises of Spring)

As her first Off'rings to her Infant King. （下線は筆者）

Dryden, *Eclogue*, IV, 1-24.

原文に於いて「クーマエの歌に予言された」'Cumaei carminis' はドライデンでは 'foretold by sacred Rhymes' と訳されており、具体性は軽視されている。また表現が解説的になっているが、この点もドライデンにはよく見られる翻訳の傾向で別段特筆すべきことでもないといえる。大筋においてドライデンは原典を、heroic couplet を駆使しながら、かなりの程度、忠実に翻訳していると言えるであろう。

しかし、ドライデンの政治的な偏向性に慣れ親しんでいる読者には、見過ごし得ない表現があることに気付くのである。鉄の種族は絶え 'ferrea [gens] primum desinet' と原文にあるところは 'The base degenerate Iron-off-spring ends' (l.9) のように 'base,' 'degenerate' という形容詞が付加されている。注目すべきは16行目であろう。'The Father banished'd Virtue shall restore' 父は追放された美徳を取り戻すであろうというのだが、この部分に対応する箇所は原文にはない。

またドライデンにおいては、この子どもは 'the jarring Nations' (l.20)「相い争う国民」を平和裡に統合するという。この表現に対応する部分を原文に求めれば、それは 'pacatum reget orbem' になるであろうが、「平和になった世界」或いは「世界を平和にして」支配するであろう、というのが原典の意味である。やや政治的なニュアンスをドライデンは含ませようとしていることが感知されるのである。またこの黄金の種族の子どもは 'Infant King' (l.24) と形容されている。これが指すものとして、1688年以後という文脈では、ジェイムズ２世の息子 James Francis Edward (1688-1766) ――寧ろ the Old Pretender という名前で知られる御子―― を連想することはさほど困難ではないと思われる。

ここで1688年前後の政治的な状況を整理しておかなければならない。ジェイムズ２世の最初の妻は初代クラレンドン伯エドワード・ハイド Edward Hyde, first Earl of Clarendon (1609-1674) の娘アン Anneであった。このアンとの間に二

人の子供が出来たが、その二人とも女王となった。一人はオランダのオレンジ公に嫁いだメアリーであり、もう一人はウィリアムとメアリーの共同統治の後を継いだ、最後のスチュアート王家の出身の王（女王）となるアン (Anne, 1665-1714) であった。1685年にチャールズ 2 世が没し、ヨーク公ジェイムズ James, Duke of York はジェイムズ 2 世として即位する。そして彼はイタリアのモーデナ Modena 出身のメアリー (Mary D'Este) と再婚し、――最初の妻アンは1671年に死亡していた――一子をもうけるのが1688年であった。その一子とは James Francis Edward であり、後の Old Pretender と称され大陸から王位を請求し続けた男であった。翻訳が刊行された1697年当時、ジェイムズはフランスに亡命しており、その息子 James Francis Edward はまだ 9 才程であった。

以上のように、このドライデンの『牧歌』第 4 歌を1688年以後という文脈の中において読む時、読者は所々に政治的な含意を感じるであろう。ドライデンの詩のここかしこに散見される反ウィリアム的な揶揄や冷笑またジャコバイト的な心情は、彼の翻訳詩を通して浸透しているように見える。しかし問題はそれほど単純ではないのである。なぜならば、この第 4 歌にはその様な政治的な読みを不可能にするような事情があるからである。その事情とは、この牧歌の第 4 歌の翻訳の成立に係わる事であるのだが、実はこの翻訳は1694年になされたものではなく、実は名誉革命以前の1684年になされ公表されていた、という事実である。

新興の出版者であったトンソンは翻訳詩集を企画し、その第 1 弾として1684年に *Miscellany Poems* を刊行したが、ドライデンはトンソンの求めに応じてウェルギリウスの牧歌の第 4 歌と第 9 歌の翻訳を提供していた。そして第 4 歌は1697年の翻訳集に収めたものと殆ど変わりはないのである。第 4 歌の成立に関してこのような事情があることを考慮すれば、当然のことながらこれまで見てきたような政治的な解釈は再考されなければならないことになる。つまりこうした事実は第 4 歌を、ウェルギリウスの他の作品と同じようにドライデンがトンソンと契約した1694年以降のポスト名誉革命という文脈において考えること

は実質上できないことを意味する。第4歌において推定された反ウィリアム的な感懐の表白とされたものは、まったく意味をなさなくなってくるのである。

そして強調されなければならないことは、この第4歌の翻訳をポスト名誉革命という文脈ではなく1684年という年において分析する時、ドライデンの政治的な比喩の用い方に関して、新しい視野が拓けてくるということである。政治的反ウィリアム的な偏向と思われた詩句は、新しく吟味し直されなければならない。既に述べたように、ポスト名誉革命という文脈では王ウィリアム3世に対する間接的な揶揄とも思えた詩句は、もはやそのように断定することも推定することも不可能である。ドライデンの政治的な言及は、厳密に言えば必ずしも歴史的な事実に言及していたり、また特定の事実と対応しているとは言えなくなるのである。既に見たようなドライデンの政治性はつまりは新しい角度から考察されなければならないという必要が生じてきたとも言えるだろう。

まとめて言えば次のように言えるであろう。『牧歌』の第4歌を政治的な偏向性が散見される他の翻訳の影響下に読めば、この第4歌の中にも同様な政治的な偏向性が感じられるのである。ドライデンの他の翻訳の影響下に第4歌を読んだ読者はそのように感じるに違いない。しかし問題はそれほど簡単ではない。この歌は1697年の作品集に収められているが、実はもっと早い時期、つまり1684年以前になされ発表されていたのである。このような事実はドライデンの政治的な詩句について新しい解釈の可能性を拓くものとなるように思われるのである。今まで翻訳の中で政治的な偏向性として解釈された含意は、違う文脈の中で再解釈されなければならないのである。

3

トーリー派 'Tory' やホイッグ派 'Whig' という政治用語が生まれて来た背景には、1680年前後のチャールズ2世の王位継承問題があったことは言を俟たない。トーリーとは主にチャールズ王支持派を指し、ホイッグとは王に反対する者達

を指すようになるのだが、この17世紀後半から Paper wars と呼ばれるような文書による熾烈な戦いがトーリー、ホイッグの両派によって繰り広げられたことは周知の通りであろう。(現在それらは *Poems on Affairs of State,* 7 volsという名のアンソロジーで読むことが出来る。) そして『牧歌』の第4歌は黄金時代の再来というテーマの故に両派の文人達に恰好の素材を提供したのであった。『牧歌』第4歌は以下に見るように様々に展開応用することが可能な作品であったことは覚えておかなければならない。

まず1702年に発表された以下の作品を見てみよう。

Sicilian Muse, thy Voice and Subject raise,
All are not pleas'd with Shrubs and *Sylvan* Lays,
Or if we Shrubs and *Sylvan* Lays prepare,
Let 'em be such as suit a Consul's Ear.
Now *Merlin*'s Prophecies are made compleat, 5
And *Lilly*'s best Events with Credit meet;
Now Banished Justice takes its Rightful Place,
And *Saturn*'s Days return with *Stuart*'s Race.
With its own Luster now the Church appears,
As one Year makes Amends for fourteen Years, 10
And Joys succeed our Sights and Hopes succeed our Fears.[11] (下線は筆者)

この翻訳は1702年に発表されたものである。この年にウィリアム3世が死亡しStuart王家出身の最後の女王となるアンが即位した。アン女王のトーリー贔屓はつとに知られるところであった。'The Golden Age, from the fourth Eclogue of Virgil' という題を俟つまでもなく、牧歌の第4歌の翻訳であることは明かである。但し、読み進むにつれてこの翻訳が、政治的には Stuart 王家側に立ったものであることが明かとなる。5行目にある 'Merlin's Prophecies' は原典にはないが、これは Marlinus Liberatus 即ちJohn Partridge の almanack を指している。こ

れは毎年出版されたらしい。また6行目の Lilly とは同様に William Lilly という占星術師を意味している。彼もまた almanackmaker であった。その almanack に予言されている通り、いよいよ Stuart 家が復活したというのである。これは1702年にウィリアム3世が没し、スチュアート王家の Anne が女王として即位したことに対応する。この翻訳は原典を離れてスチュアート王家の復活を言祝ぐ歌となっているのである。10行目に言及される14年間とは、ジェイムズ2世がフランスに逃れた1688年の名誉革命から1702年までの、ウィリアム王の治世を指すのである。1年間がその14年間の償いとなると詠うのだ。この翻訳者はそれほどにスチュアート王家の復活を求めていたことが、極めて明瞭に伺われるのである。

ウェルギリウスの牧歌は、田園の安楽などを詠うものではなく極めて政治的なものであることは言を俟たない。牧歌の第4歌は既に見たように、黄金時代の再来を詠うものであるが、政治的に中立というのではなかった。この翻訳では、立場は明かとなっている。すなわちトーリー派側に立ってトーリー派の勝利を称えるのである。この著者にとって黄金時代とはトーリー派の重鎮が主導権を握りながらアン女王が支配する時代のことであった。

次には上の翻訳が出版された翌年すなわち1703年1月に William Walsh によって為された作品を検討したい。それは 'The Golden Age Restor'd' と題され、'the 4th Eclogue of Virgil, supposed to have been taken from a Sybilline Prophecy, Imitated' と副題が付けられている。正確には、この作品はウェルギリウスの牧歌の第4歌を模倣した作品である。

Sicilian *Muse, begin a loftier Flight,*
Not all in Trees and lowly Shrubs delight:
Or if your Rural Shades you still pursue,
Make those Shades worthy of a Statesman's view.
The time is come, by antient Bards foretold, 5
Restoring the *Saturnian* Age of Gold:

The Vile, Degenerate Whiggish Offspring ends,
A High-Church Progeny from Heaven descends.[12] 8 （下線は筆者）

ウェルギリウスの dactylic hexameter を英語に翻訳するに際しては heroic couplet を用いることが一般的になってきている。この翻訳もまたトーリー派のものであることは多言を要さない。7行目に於いて Walsh は明かにホイッグ派の子孫の時は終焉を迎え、これからはトーリー派の世の中になることを主張している。8行目で言及される A High-Church Progeny とは、言うまでもなくトーリー派が待望しているスチュアート王家の王子を意味している[13]。

しかし、牧歌の第4歌はまた違う解釈の可能性をも内包している。トーリー派にとって黄金時代の再来とはトーリー派が政治を牛耳ることが出来る時代を意味した。しかしその時代はホイッグ派にとっては、言うまでもなく決して黄金時代ではない。彼らにとっての黄金時代とは、トーリー派の連中を政権から追い落としホイッグ派が政権の中枢を占めることが出来る時代である。ホイッグ派の立場に立てば、ウェルギリウスの黄金時代の再来とは次のようなものに変質する。

Sicilian Goddess, whose Prophetick Tongue
Reveals Fate's dark Decrees in Sacred Song;
The present vile degenerate Age disdain,
And sound the Glories of a Future Reign:
When Whigs again shall rouse the drooping Land, 5
Unnerv'd and weaken'd by a Female Hand.
Stamford for his great Wealth and Wisdom known,
Already has ador'd the Rising Sun,...[14] （下線は筆者）

7行目に言及される Stamford とはホイッグ派の大物政治家であった第2代スタムフォード伯爵 Thomas Grey (c.1653-1720) を指す。スチュアート王家のアン女

王が即位しトーリー派が政権に復帰した、トーリー派にとっての黄金時代は、しかし、ホイッグ派にとっては厭うべき時代に他ならない。その時代は「女性の手によって」（6行目）国力が殺がれる時代である。ホイッグ派にとっては雌伏の時代であるが、彼らにとって黄金時代が再び訪れて来ると言う。それはホイッグの政治家 Stamford によって招来されるだろう、という。1703年という時期にあって、ホイッグ派には忌むべき時ではあったが、希望がない訳ではなかった。

女王のアンには成人するまで生き延びた子供は一人もいなかった。それ故にアン没後の王位は、1701年の王位継承法 (Act of Settlement) によってハノーヴァー家のジョージが継承することに定められていた。Stamford が「既に 'the Rising sun' を崇めている」（8行目）とは、彼が既にハノーヴァーに赴き、将来のイギリス王ジョージ1世に拝謁したことを意味している。ホイッグ派は着々と将来の王との絆を深めていたのである。彼らにとって黄金時代とはアン女王以後、スチュアート王朝が途絶えた後のことなのである。

この様に、立場が違えば必然的に黄金時代が意味する内容も異なってくることは明かである。ウェルギリウスの黄金時代の到来を言祝ぐ『牧歌』第4歌は、トーリー、ホイッグ両派によってどのようにも解釈されうる要素をもっていたのである。ウェルギリウスの『牧歌』第4歌は、このように幅広い解釈を提供する可能性を秘めた作品であることは記憶されなければならない。

次にもう一つの牧歌の可能性を見ておきたい。牧歌の翻訳を試みた詩人は多いが、その中にアレクザンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) がいる。彼の翻訳は 'Messiah, a Sacred Eclogue' とされ 'In Imitation of Virgil's Pollio' と副題されている。題名に既に示されているように、ウェルギリウスの『牧歌』第4歌は既に、メシアの誕生を言祝ぐ歌に改変されている。

Ye Nymphs of Solyma! begin the song:
To heav'nly themes sublimer strains belong.

The mossy fountains, and the sylvan shades,
The dreams of Pindus and th'Aonian maids,
Delight no more — O thou my voice inspire 5
Who touch'd Isaiah's hallow'd lips with fire!
Rapt into future times, the Bard begun:
A virgin shall conceive, a Virgin bear a Son!
From Jesse's root behold a branch arise,
Whose sacred flow'r with fragrance fills the skies: 10
Th'Aethereal spirit o'er its leaves shall move,
And on its top descends the mystic Dove.
Ye Heav'ns! from high the dewy nectar pour,
And in soft silence shed the kindly show'r! [15] （下線は筆者）

ウェルギリウスはシシリアのムーサ達に霊感を与えてくれるように祈願したが、ポープに於いては祈願の対象は Solyma のニュンフ達である。Solymaとは*'Ιερ-σόλυμα* の後半部でありイエルサレムを意味する。ユダヤの偉大なる預言者イザヤに霊感を与えたものに祈願するのである。ポープ自身が脚注において注意しているように[16]、この箇所は聖書の「イザヤ書」の第7章14節、また第9章の表現を巧みに折込みながら牧歌第4番の模倣を行っているのである。Jesse（エッサイ）の根から若芽が育つというのだが、これは「イザヤ書」第11章第1節に典拠がある。このようにメシアの誕生を歌うのである。ポープに於いては、もはや風刺的な色彩を離れてキリスト教的なものに変質している。

要するに、強調しなければならないことは、以上見たように第4番の『牧歌』は様々な解釈応用が可能な詩であったことである。トーリー、ホイッグの両派はそれぞれに自分達に都合のよいようにウェルギリウスの原典を解釈し展開し応用した。またポープはこれを宗教的なメシアの到来を予言する歌に仕立て上げた。牧歌第4歌にはこのように、多様な解釈と展開を可能にする柔軟性があったのである。それ故に、もしもドライデンがもっと政治的にコミットする用意があったならば、現在読者が手にする牧歌の翻訳よりも、より政治的に踏み

込んだ詩を書くことはさほど困難ではなかっただろうと推測できるのである。現行の翻訳よりも、より巧みにより密やかに政治的な含意を折込みながら政治風刺詩を書くことは容易であっただろう。しかしドライデンは政治的にあまりコミットしてはいない。ある程度の政治的な偏向性は既に見た通りである。それは否定はできない。しかし、牧歌の第4歌の（以上に見たように）多様な翻訳の、また模倣の、また応用の可能性を鑑みる時、ドライデンの翻訳はあくまでも翻訳の域に留まっていることは明かである。

4

我々は先にドライデンの政治的な偏向の例として『アエネーイス』の場合をみた。ドライデンに於いて

> Then they, who Brothers better Claim disown,
> Expel their Parents, and usurp the Throne.

という箇所である。この2行には明白な政治的偏向が感じられるのだが、問題はそれだけではない。ここで注目しなければならないことは、先に述べた通りこの2行がまったくローダーデイル伯 Earl of Lauderdale の翻訳に依存していることである。ローダーデイル伯爵はドライデンよりも前に既にウェルギリウス訳を完成させていたことが知られている。伯爵は翻訳を出版する意図を持っていたようだが、実現を見ずに死亡してしまった。そしてドライデン自身が、当時としては最新の翻訳であった伯爵の訳に恩恵を被ったことを隠してはいない。その経緯を『アエネーイス』の献辞 Dedication に於いて、ドライデンは次のように書いている。'having his manuscript in my hands, I consulted it as often as I doubted of my author's sense; for no man understood Virgil better than that learned Nobleman.'[17] また Mark Van Doren はドライデンがローダーデイル訳を、200行

ばかりは少しも改変せずに借用し、若干の変更を加えただけの行が800 行ほどもあることを指摘している[18]。ドライデンは誠に多くをローダーデイル伯に負っていると言わざるを得ない。

そのローダーデイル伯の訳では問題の2行は次のようになっている。

Here those who Brothers for a crown disown
Turn out their parents, and usurp the throne... [19]

つまり一見ドライデンの強烈な反ウィリアム的な心情の吐露と思われたものは、単にローダーデイル訳の借用に過ぎなかったのである。(場合によっては瓢窃とも非難されるであろう。) 決してドライデン自身が着想した詩句ではなかったのである。寧ろローダーデイルの翻訳に導かれただけの表現であるとも言えるのである。そしてこの箇所に関して何故ドライデンがローダーデイル訳をこの様に簡単に利用したか、その理由もまた簡単に推定できるのである。原文の親や兄弟に不幸を働く者達は、政治の時代という17世紀後半の時にあっては、ローダーデイル的な訳の方が遥かに読者に訴えるところが多いことは容易に推測できるのである。この様な事実を勘案する時、ドライデンに帰せられることの多い政治的な偏向性というものも、また再考しなければならなくなるのである。ドライデン自身が政治的に積極的にコミットした表現とはなっていないと言えよう。このような貸借の関係は、ドライデンの政治的な偏見をいわば割り引いて考えなければならないという新たな可能性を示唆していると言えるのではあるまいか。この点は忘れてはならないように思われるのである。

ドライデンが常に政治的な傾きを有していた訳ではないことは、次の例からも推測できるのである。『牧歌』の第1歌はクルティウス(E. R. Curtius) によって、ヨーロッパ文学のラテン的な教養はこれを読むことから始まった、と評された作品である[20]。全体は牧人であるメリボエウス Meliboeus とティーテュルス Tityrusの対話から構成されている。ローマの政情不安が背景としてある。具体

的には第2回3頭政治によるBC41年の土地没収がテーマとしてあるのだが、その時にメリボエウスは結局は土地を奪われローマを追放される。一方ティーテュルスはローマまで陳情に行き、その甲斐もあって土地の没収を免れる。その中で次のようなメリボエウスの台詞が注目を引くのである。

en umquam patrios longo post tempore finis,
pauperis et tuguri congestum caespite culmen
post aliquot, mea regna videns, mirabor aristas?
impius haec tam culta novalia miles habebit, 70
barbarus has segetes. en quo discordia civis
produxit miseros: his nos consevimus agros. （下線は筆者）
Eclogae, I, 67-72.

メリボエウスはここで、彼自身が長い時間の後でまたローマに帰国でき、そして親の土地を、東屋の屋根を、自分の王国 mea regna（自分の畑のこと）を、そして麦の穂を再び見るようなことは多分ないであろうと思い悲嘆にくれるのである。そして不敬虔で野蛮な兵士が自分のよく耕した土地の持ち主になることを慨嘆し、そして彼は言う、「見よ、どれほど争乱 'discordia' が不幸な市民を 'civis... miseros' を生みだしたかを」と。ここには追放されるメリボエウスの痛切な思いや怒りが表されている。

そのメリボエウスの思いはドライデンでは次のようになっている。

O must the wretched Exiles ever mourn,
Nor after length of rowl'ing Years return?
Are we condemn'd by Fates unjust Decree,
No more our Houses and our Homes to see?
Or shall we mount again the Rural Throne, 95
And rule the Country Kingdoms, once our own!
Did we for these Barbarians plant and sow,

On these, on these, our happy Fields bestow?
Good Heav'n, what dire Effects from Civil Discord flow! （下線は筆者）
Dryden, *Eclogue*, I, 91-99.

原典のメリボエウスの台詞は極めて政治的である。政治的な表現として展開させるには大きな可能性を秘めた箇所となっている。しかしドライデンは抑制をもって訳しているように感じられる。政治的な意味を内包している単語も使われている。'Exiles,' 'Throne,' 'Kingdoms,' 'Civil Discord' などであるが、これらの単語はややもすれば、親ジェイムズ的で反ウィリアム的な感情と結び付けられることが多かった単語である。しかしここでは殆どそうした政治的な感情とは無縁である、と言ってよいであろう。'Exiles' という表現は原文にはなく、メリボエウスはその言葉こそ口にはしないが、要するにメリボエウスは追放の身の上であり 'Exiles' なのである。我が王国 'mea regna' は原文に使われているし、'Discordia civis' (civis は miseros を修飾しており形容する単語は違っているが) は、ほぼ直訳と言ってよい 'Civil Discord'と訳されている。

このことから解ることは、ドライデンは必ずしも常に反ウィリアム的な心情を翻訳に挿入しているわけではないということである。'Discordia civis' の例に見られるように、政治的な含意として展開することが可能である場合にも、反ウィリアム的な心情を書き込むことなく、原文をかなり忠実に訳していることは記憶すべきことのように思われるのである。

またドライデンの政治的な偏向性の主張を補強するものとして、ドライデンが『牧歌』『農耕詩』『アエネーイス』の3作をそれぞれ反ウィリアム派の貴族に献呈している、という事実が挙げられる。つまり『牧歌』はクリフォード卿チャドリー男爵 (Lord Clifford, Baron of Chudleigh) に、『農耕詩』はチェスターフィールド伯爵 Earl of Chesterfield に、また『アエネーイス』はマルグレイヴ伯爵 Earl of Mulgrave にそれぞれ捧げられているが、彼らは皆反ウィリアム派の貴族達であった。しかし、こうした事実の裏で、ドライデンが後書き 'Postscript' の

中で、ドライデン自身とは政治心情を異にする、ウィリアム派の貴族達に感謝の意を表明しているという事実は見落されてはならない。ピーターバラ伯 Earl of Peterbrough、ダービー伯 Earl of Derby 及びシュルーズベリー公爵 Duke of Shrewsburyは皆ウィリアム体制の支持者であったが、ドライデンはこうした反対側の人達にも礼を失しないように配慮してバランスを取っているのである。ドライデンの政治性を判断にする際に、こうした事実を無視することはできないのである。

そのように考えて来る時、ウェルギリウス翻訳に関して、これがトーリー的な政治的偏見訳であると指摘するだけでは、その政治性の全体を捉えたことにはならないことは自明であるように思われるのである。ドライデンの政治性はより複雑で微妙な様相を呈しているのである。ドライデンほどの詩人であれば、反ウィリアム的な政治性をより大きな規模で翻訳の中に潜ませることは容易であったと思われるのである。但しその意図があればの話である。微妙に、しかも疑う余地のない程頑迷にコミット出来たはずである。しかし、ドライデンはあくまでもある節度の内に留まっているように思われるのである。その理由はなぜか。次にその点を考えたい。

5

ドライデンは1680年に出版された *Ovid's Epistle*s の 'Preface' の中で翻訳についての考えを述べている。そこで彼は3種類の翻訳を提唱している。それらはパラフレーズ 'paraphrase'、メタフレーズ（'metaphrase' 直訳、逐語訳）そして模倣 'imitation' の3種類である[21]。ドライデンは広い意味では模倣もまた翻訳のなかに含まれると考えていた。ドライデンは翻訳を現在よりも広い概念で捉えていたのであるが、ウェルギリウスの翻訳に際しては、全体的に考えればかなり原典に忠実に訳していると言えるのではなかろうか。

トーリー派ホイッグ派といった立場の違いはあれ、詩人達は牧歌の第4番を

素材にして風刺詩を書いた。それらの多くは文学史の中に埋もれている。もしもドライデンに、黄金時代の再来という神話を用いて風刺詩を書くつもりがあったならば簡単に書き得たであろう、と想像することは難くない。しかし彼はそうはしなかった。『農耕詩』の翻訳に用いられていた 'melior' に対する訳語 'lawful King' とか、或いは 'Dutch' という部分には確かにウィリアム 3 世に対する反感や揶揄が感じられる。『牧歌』『農耕詩』『アエネーイス』合せて18,000行余りのなかで、確かに反ウィリアム的な心情を明らかに表明していると言える部分がある。それは否定出来ない。しかしそうした政治的な含みは、全編にわたって横溢していると言える程ではない。全体は寧ろ反ウィリアム的な感情が抑制されており、翻訳の姿勢は正統的であるとさえ言うことが出来るほどである。その点を考えれば部分的にみられる反ウィリアム的な感情は一時的な感情の発露であると理解すべきではなかろうか。つまり、潜在的にドライデンが感じている反感がその感情に相応しい文脈をウェルギリウスの原典の中に見つけた時に、触発されて溢れ出たものと理解すべきではなかろうか。反ウィリアム的な表現は、熟考され推考された上での表現というよりも、むしろ突発的な反感となって溢れた、と理解した方がよいのではなかろうか。ウェルギリウスの原典を風刺的に英訳することが可能であるような文脈においても、ドライデンは必ずしも風刺的なニュアンスを付与してはいないことは記憶されてよいだろう。(例えば 'discordia civis' などがこの一例として挙げられよう。) ドライデンの翻訳は、極めて抑制がとれた形で訳されているのである。

ドライデンのウェルギリウス翻訳を読むとき、途中の僅かな行においては婉曲な、或いは露骨な政治風刺に遭遇するであろう。その印象は時に大変に強いものであろう。それ故にこの翻訳を彩る特徴を政治的な偏向性に求める心情は理解できないものではない。しかし虚心に読み続ければ、その印象はまた異なるものになるであろう。つまり、上のような政治性を帯びた詩行は実はそれほど多くはないのである。政治的にコミットしている詩句があることは否定はできないが、読者が気付く特徴は寧ろ翻訳の格調の高さ・几帳面さ・端正さであ

ろう。牧歌の第4番の翻訳に見られる政治性は、ある特定の年の特定の政治状況に対する暗示・揶揄または希望の表明というよりも、あくまでスチュアート王家に対する一般的な忠誠心や希望の表白であると解釈した方がよいと思われるのである。

ドライデンが行ったことは、単に翻訳という作業の中で密かに時のウィリアム3世とメアリーの体制に対して政治的な風刺を織り込んで鬱憤ばらしをしていた、というような次元の話とは根本的に異なることはどれ程強調してもし過ぎることはないであろう。政治的な言及はあくまで穏やかであり、翻訳という境界の中で留まっており、翻訳の境界を越えてはいないと言えよう。翻訳と〈詩によるプロパガンダ〉との境界線上で翻訳を行っていた。言い替えれば、その両者の緊張関係の中で翻訳していたと言えようが、常に翻訳の領域の中に留まっていたと言えよう。ドライデンの関心の大部分は、寧ろ、如何に格調高くウェルギリウスを翻訳するか、ということにあったのであり、政治的な揶揄や心情の表白は、いわば副次的な関心でしかなかったということが出来るように思われるのである。牧歌の第4番、また第9番に於いては、政治的な事柄への言及がともすれば曖昧で、事実との間に明確な対応関係を見いだすのが困難である原因は、そうした事情があるためであると言えよう。

ドライデンは翻訳から風刺詩（或いは政治的なプロパガンダ）への境界を越えることはなく、常に翻訳の領域に留まっていた。その理由は、ウェルギリウスの翻訳に関してドライデンの関心の主要な部分は、政治的な要素よりも他の面に向けられていたことが挙げられるのではなかろうか。それは翻訳として第一級の翻訳に仕上げるということではなかろうか。ウェルギリウスのhexameter（『牧歌』『農耕詩』『アエネーイス』はすべてこの韻律で書かれている）を格調高く雄弁な iambic pentemeter に移し代えることが、この1697年前後の時代に、ドライデンにとって最大の問題であったのではなかろうか。所々に垣間みられる政治的なメッセージの存在とそのメッセージのジャコバイト的な暗示の存在はもとより否定はできない。ドライデンの翻訳はやはり1690年代と

いう時代に部分的には確かに制約されているが、しかし同時に1690年代という制約を越えようとしている部分もまた確かにあることも見過ごしてはならない。そして17世紀の最後という時代の桎梏を越えているとすれば、それはドライデンの翻訳者としての翻訳についての思想が、風刺詩人としての思想よりも前面に出てきているが故にそうなったと言えるのではなかろうか。

要するに、ドライデンは時折、政治的な比喩を織りまぜて訳すのを好む、そしてその政治的な立場は当然、たまたま反ウィリアム的になる、というのが事実に近いのではあるまいか。政治的な比喩は寧ろ詩の技法として理解する方がよいであろう。つまり政治的な含意は、それが語られる文脈においては、翻訳をより味わい深いものにするために用いらる数々の技法の一つとして理解すべき性質のものである、と言うことができるように思われるのである。これは結果として反ウィリアム的になるのであり、このことは、ウィリアム王に対する悪意を初めから意図していたというのではない、と言う方が事実に近いと言えるであろう。いずれにせよ、政治的な偏向性はドライデンのウェルギリウス翻訳全体の中では、顕著ではあるが副次的な部分を占めているに過ぎない。

アレクザンダー・ポープはホメロス訳の序文 'Preface' に於いてドライデンのウェルギリウス訳の卓越性を賞賛した[22]。殆ど絶賛していると言ってもよいほど誉めている。そしてポープをしてこれほどに賞賛させたのは、English Virgil を創ろうとするドライデンの熱意であり、ドライデンの翻訳の持つ普遍的な卓越性であったと言えるのではなかろうか。そのような熱意は政治的な偏向訳というような言葉に還元されてしまうようなものではないであろう。またこうした普遍的な翻訳の特質はドライデン自身も自覚していたように感じられるのである。ドライデンは翻訳に付した後書き 'Postscript' の中で、自分の翻訳は後世の人々に、決して我が祖国の不名誉ではないものとして判断されるであろう、と述べている[23]。控えめではあるが、しかし明確に翻訳の出来具合について自信を覗かせている。

17世紀に刊行されていたウェルギリウス翻訳とドライデン訳の関係を（主に

『アエネーイス』の第4巻について）研究した L. Proudfoot は、ドライデンが多くの先行翻訳を参照したのは要するに決定訳 definitive version を求めていたからだというような発言をしているが[24]、こうした見方は納得のゆくものと言えるであろう。『桶物語』(*A Tale of a Tub*, 1704) を書いたジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) は若い頃にサー・ウィリアム・テンプル (Sir William Temple,1628-99)の邸宅に寄食していたが、この主人の影響のもとにピンダロス風のオードを作ったことがあった。それを見たドライデンから「スウィフト君、君は決して詩人にはなれないね」"Cousin Swift, you will never be a poet." と言われたという有名な逸話がある[25]。そのため彼はドライデンにかなりの反感を抱いたようだ。にも拘わらずスウィフトは『桶物語』の中でウェルギリウスを引用した際に、訳文としてドライデンの英訳を付記している[26]。この事実は図らずもドライデンの訳文が如何に優れたものであったかということを証明しているように思われるのである。

註

1）James Anderson Winn, *John Dryden and His World,* Yale UP, 1987, p. 476.

2）William Kinsley, ed. *The Poems of John Dryden*, OUP, 1958, vol. 4, p. 2032.

3）William Frost and Vinton A. Dearing, eds. *The Works of John Dryden,* University of California Press, 1987, vol. 6, p. 849.

4）William Frost, *John Dryden, Dramatist, Satirist, Translator*, AMS Press, New York, 1988. Steven Zwicker, *Politics and Language in Dryden's Poetry: The Arts of Disguise*, Princeton University Press, 1984. 特に第6章 'Politics and Translation' pp. 177-205 参照。なおわが国においては、岡照雄氏がドライデンの翻訳詩を考察し同じ様な結論を導きだしている。cf. 「雄鶏と狐論」『菅泰男・御輿員三両教授退官記念論文集』（あぽろん社、1980）、「Dryden の Ovid 翻訳 — *Of the Pythagorean Philosophy* について—」『英文学の表層と深層』（東海大学出版会、1987）。

5）Howard Erskine-Hill, Paul Hammond の両氏も同様の政治的な読み方をしている。Howard Erskine-Hill, *Poetry and the Realm of Politics* (Oxford, Clarendon Press, 1996). Paul

Hammond, *Dryden and the Traces of Classical Rome*, Oxford UP, 1999.

6）Vergilius からの引用は Loeb Classical Edition に拠る。以下同じ。H. R. Fairclough, ed. *Virgil*, 2 vols, (William Heinemann, London, 1916, new & revised ed. 1935).コメンタリーとして、Robert Coleman 氏 (Cambridge Greek & Latin Classics) や R. D. William 氏 (St Martin's Press, 1987) H.E.Gould 氏(Bristol Classical Press, 1963, rep. 1983) などを参照した。

7）ドライデンからの引用はカリフォルニア版に拠る。William Frost and Vinton A. Dearing, eds. *The Works of John Dryden*, University of California Press, vol. 5, pp. 228-29.

8）William Frost 氏は『アエネーイス』第3巻490-91行のドライデン訳に触れて、原文に於いて暗示的に描かれている意味がドライデンに於いては明示的に訳されていることを指摘している。しかしこの傾向はこの箇所だけには留まらないと思われる。cf. William Frost, *Dryden and the Art of Translation*, Archon Books, 1969, p. 89.

9）蜜蜂の王が実は雌であることに関しては古来種々の議論があったようだ。Richard F. Thomas は『農耕詩』のコメンタリーの中で、Varro をはじめ多くの古典作家が蜂の王は雄と考えたと記している。また "even if V. knew the truth, it would have been in his interests to suppress it"とも述べている。Richard F. Thomas, ed. *Virgil, Georgics*, vol. 2 (Cambridge Greek and Latin Classics, CUP, 1988) p. 151.また河津千代氏は、女王が支配していることは17世紀にオランダの自然科学者スヴァンメルダム(1637-80)によって発見されたが、公表されたのは彼の死後1752年のことであったと書いている。河津千代訳『ウェルギリウス、牧歌・農耕詩』(未来社、1981) p. 327参照。なおジョン・ミルトンもまた誤解していたことは *Paradise Lost*, vii, 490 (Douglas Bush, ed. *Milton, Poetical Works*, (OUP, 1969), pp. 351-52)からも伺える。

10）quo... desinet の箇所は一応この様に理解しておきたい。

11）Frank H. Ellis, ed. *Poems on Affairs of State, Augustan Satirical Verse 1660-1714,* vol. vi, 1697-1704, Yale UP., 1970, pp. 451-53.

12）Frank H. Ellis, *op. cit.* p. 491.

13）cf. OED, "High-Churchman"

14）Frank H. Ellis, *op. cit.* p.519.

15）Herbert Davis, ed. *Pope, Poetical Works* (OUP, 1978), p. 32.

16）ポープは次のような脚注を付けている。 Isaiah, Ch. vii. 14. Behold, a Virgin shall conceive and bear a Son. — Ch.ix. 6, 7. Unto us a Child is born, unto us a Son is given; the Prince of Peace: of the increase of his government, and of his peace, there shall be no end: Upon the throne of David, and upon his kingdom, to order and to establish it, with judgment, and with justice, for ever and ever. — Herbert Davis, *loc. cit.*

17）W P Ker, ed. *Essays of John Dryden*, OUP, vol 2, p. 235.

18) Mark Van Doren, *The Poetry of John Dryden* (Harcourt, Brace and Howe, 1920), p. 101.

19) Cited in William Frost, *op. cit.* p. 200.

20) Ernst Robert Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages,* translated by Willard R. Trask, Princeton UP, 1973, p. 190.

21) W P Ker, *op. cit.* vol. 1, p.237.

22) Pope, Preface to his translation of Homer's *Iliad,* Twickenham Edition, vol. 7 (1967), p. 22. 'However had he translated the whole Work[of Homer], I would no more have attempted Homer after him than Virgil, his Version of whom (notwithstanding some human Errors) is the most noble and spirited Translation I know in any Language.'

なお、ドライデンのウェルギリウス翻訳を賞賛する批評家や学者は多い。カリフォルニア版ドライデン全集第6巻 p. 887- 参照。

23) カリフォルニア版ドライデン全集第6巻 p.807. なお、国にとってのドライデンの翻訳の有用性に関して John Barnard が次のように述べていることは注目に値するように思われる。'A recurrent theme in Dryden's three dedications and Postscript is the belief that his translation is a patriotic endeavour, one undertaken on his country's behalf, one which united it in the face of the divisive political and religious tensions evident in the 1690s —and only too evident in the lived experience of those who chose to subscribe to the Virgil between 1694 and 1697.' 'Dryden, Tonson, and Virgil', in Paul Hammond & David Hopkins, eds. *John Dryden, Tercentenary Essays*, Oxford, Clarendon Press, 2000, pp.200-01.

24) L. Proudfoot, *Dryden's Aeneid and Its Seventeenth-Century Predecessors*, Manchester UP., 1960, pp. 266-67.

25) Michael Foot, *The Pen and the Sword,* Macgibbon & Kee, London, 1966, p. 19.

26) Herbert Davis, ed. *A Tale of a Tub with Other Early Works 1696-1707* (Oxford, Basil Blackwell, nd), p. 33.